

敗戦のビルマにて

新潟県 富 樫 辰太郎

昭和二十年九月二十日、私は、派遣中であつた主計教育隊の解散により、原隊である厳兵団独立歩兵第一三八大隊に復帰した。

「武装解除」

九月二十三日、部隊の集結地ワガルにおいて、ついに英軍の武装解除をうけることになつたのである。この日午前、武装した日本軍の最後の思い出に、全員完全軍装で大隊長の閲兵式が執行され、銃は菊の御紋章を潰してもらい、剣とともに、英軍指示の場所に集積して終わった。今日からは日本人の最もきらいな俘虜ということ、そこには英軍の厳しい労役が待っていたのだ。

「抑留所生活」

十月、パンガのゴム林内にできた日本軍降伏者収容

所に移動。間もなく労役が始まつた。季節は乾期にはいり、暗いうちに出発するので肌寒い。日が上れば猛暑になる。仕事は海上沖合に投棄する旧軍の弾薬運搬、重いこと身にこたえる。砂糖、米などの積み替え作業にも出た。英軍の給与は悪く野菜もない毎日が続く。栄養失調者も出ているようだ。

ここで、首実験なるものを経験した。いわゆる戦犯探しのためである。部隊全員両手間隔一列横隊、その前を英軍憲兵の連れるビルマ人関係者一行がゾロゾロ、立ち止まってよく見つめ次へ移る。その気持ちの悪いこと、間違われたら大変だ。護送用トラックを従えている。

タンビザヤからイエ間八十四キロにわたる自動車道路建設工事が始まつた。ジャングルを伐採しての作業である。橋梁は工兵隊、歩兵部隊のわれわれは、十字鋏に円鋸と鋸だけの工具で、木は鋸で切り倒して焼き払い、根を掘り上げ、土はモッコでかついで運ぶ。服装は禪一丁にハダシかワラジ、まさに人海戦術である。この難工事も、二十一年四月に完成。早く帰りたい一

心、よく頑張ったものである。

五月、イエ道路も完成し、キャンプはムドンに移動した。労役は続く。こんなとき、心の慰めになったのが有志で組織する演芸隊であった。物資、材料の全く無い抑留所に華やかな衣裳の美女が現われたり、立派な洋服の紳士が出たり、歌に芝居にしばし境遇を忘れることができた。

六月のある日、わが部隊にも内地帰還が報せられた。しかしこの喜びも一瞬にして消えた。わが部隊はその乗船数時間前にして戦犯容疑部隊として突如帰還中止を命ぜられたのである。そのくやしき、司令部へ抗議行動を起したのもこの時であった。翌朝他部隊は続々と乗船地へ向かって出発する。しかも廠司令部までもが。第一三八大隊のみを残して。何たることぞ。

「内地帰還近し」

終戦一年も過ぎた二十一年十二月、部隊はミンガラドン飛行場キャンプに移る。到着は夜だった。ラングーの夜の夜の街の賑わい、なかでもシエダゴンパゴダがひととき美しく印象的だ。

帰還は間近かになったと感じられた。労役は依然として続くが内容が変わった。英軍兵舎の庭掃除から倉庫の使役など比較的に楽になった。英軍高級将校パーティー会場の皿洗いにも行った。モク拾いも覚えた。

「内地帰還」

昭和二十二年六月十五日、待ちに待った内地帰還が決定された。

六月十九日キャンプ出発、ラングー港から改造航空母艦「熊野丸」に乗船、途中シンガポールに寄港、あとは一路内地へと急ぐ。九州の鳥影が見え始めるとみな甲板へ出て来た。夢にまでみた日本、ついに帰ってきたのだ。

やがて、七月三日宇品港着、検疫のあと翌四日上陸、復員手続きを終えて六日召集解除となり、お互いに再会を約束し、それぞれの故郷へ向かった。